

2月第1週説教 2014.2.2

主の奉献とシメオン賛歌

ルカ福音書 2章 22-32節

さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。それは主の律法に、

「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。また、主の律法に言われているとおりに、山鳩一つがいか、家鳩の雛二羽をいけにえとして献げるためであった。そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまっていた。そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。シメオンが“霊”に導かれて神殿の境内に入って来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。これは万民のために整えてくださった救いで、異邦人を照らす啓示の光、／あなたの民イスラエルの誉れです。」

父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。

シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人々の心にある思いがあらわにされるためです。」

説教

<はじめに>

子どもは天からの授かりもの、これはどこの国、どの民族の人たちにも共通

の感情・感覚でしょう。子どもの誕生を喜び、神に感謝をささげ、また神から祝福を受けるために人は神のおられる処（ところ）に拝みにいきます。日本にもお宮参りという習慣があります。ヨセフ一家はユダヤ人の伝統にのっとりエルサレム神殿に礼拝に行きました。教会は伝統的にイエス降誕後40日目にあたる2月2日を主の祝日としてきました。きょうのテキストはこの奉獻に加えてエルサレム神殿での幼子イエスその母マリアとシメオンの出会いを描きます。

<疑問>

どうして、御子イエスがヨハネから洗礼を受けなければならないのか、「主の洗礼」のときにも疑問におもうところがありました。

どうして、神の御子イエスを神に奉獻しなければならないのか、そんな大それたことを人間がしてよいものか、また御子の母、聖母マリアがどうしてふつうの母のように清める必要があるのか・・・という疑問がきょうの「主の奉獻」にも浮かんできます。わたしたちは「奉獻」の出来事ではなく、聖書が記録する「シメオンとの出会い」から聞こえてくる福音に耳を傾けましょう。

「正しい人、聖霊がとどまっている、メシアに会うまでは死なない、霊に導かれて行動する」とシメオンは紹介されます。そして幼子イエスを抱いて有名なシメオンの賛歌（ヌク・ディミティス）で神を賛美し、そのあとヨセフ一家を祝福、とくにマリアには預言をします。聖書には一回しか出てこない人物はそうめずらし訳ではありません。シメオンも登場はこれっきり、讚美、祝福、預言のあとの後日談がありません。わたしたちはその意味を汲み取る必要があります。

<朝聞道、夕死可矣>（論語・里仁(りじん)第四から）

ちょっと聖書テキストから離れて寄り道をします。

朝（あした）に道を聞かば、夕べに死すとも可なり。

朝天下に“道”が行われているということを知ったら、夕方には死んでもいい。これは魏の何晏（か・あん）らに代表される「論語」の“古注”の解釈だが、南宋の朱子（新

儒教・朱子学の創始者)の注、いわゆる“新注”では、「朝、道(事物当然の理)を聞いたら、それで修学の目的を達したわけだから、その夕には死んでもいい。」という、求道への熱情の吐露と解釈している。いずれが正しいかは知らず。ただ、“古注”の「嘆き」とするのが味わいがある。

(中国故事物語 <http://homepage1.nifty.com/kjf/index.htm> から引用)

シメオンは救い主、幼子イエスをこの手で抱くことで安らかに去ることができると確信しました。論語のことば「夕べに死すとも可なり」とよく似ていると思います。

この論語のことばには二つの解釈があります。古い解釈では孔子の嘆き、つまり天下にいままだ正道が行われていない嘆きとされます。それから約1000年ほどたった朱子(新儒教の祖とされる)の新しい解釈では「朝、真理(人間存在の実相)を聞いて悟ることができたなら、夕方に死ぬことになったとしても、悔いはない」嘆きは消えて、個人の立場からの前向きな解釈となっています。

<シメオン賛歌>

シメオンの賛歌もこの二つの解釈で説明できるかもしれません。ただシメオンの場合は嘆きとはならず「世の救い」の確信から生まれる神への賛美となります。その賛美の核となるのは自分が抱いた幼子、つまりメシアとの出会い、だとすれば、自分が真理を知ったという喜びと解釈することもできます。聖書は論語が説く「天」を「神」として具体的にそして深く「啓示」として証言します。わたしたちはきょうの物語をとおしてシメオンはなかなか立派なことをいっているなあと感心するだけにとどまらず、神がシメオンに示した啓示を聖霊の照明により自分のものとして感じ取ることができます。わたしたち一人ひとりがそれぞれに「メシアに出合ったシメオン」をとおして神を知ることができます。またシメオンのように、聖霊のゆえに、自分の死を賛美のうちに迎えることもできるのです。

<さいごに>

主の奉献の祝日には自宅からローソクを持って礼拝に行き、聖別してもらい持ち帰るという習俗があります。10世紀ごろからフランスではやりだしたそうです。その聖別ローソクは身近な人、また自分自身の臨終の際に灯します。そしてシメオンの賛歌を祈り送り出すそうです。

主よ、今こそあなたは、お言葉どおり／この僕を安らかに去らせてくださいます。わたしはこの目であなたの救いを見たからです。（ルカ 2:29-30）アーメン